『地球の発明発見物語』地学団体研究会機関誌「そくほう」原稿感想

地学団体研究会　佐藤隆春

絹織物工場の音が一日中聞こえていた．阿武隈山地北部の小さな盆地に木造平屋の工場や住宅が寄せ集まっていた．私の故郷である人口 2 万程度の町にも本屋さんが数軒あり，書棚にはエジソンなどの偉人伝，世界の童話全集や南極探検物語りなどの本が並んでいた．子供のころ親に買ってもらい，わくわくしながら読んでいた．紹介するこの本は多くが会話，問答で書かれ，当時，夢中になって読んだ本を思い出させる．

ダ・ヴィンチが貝化石の研究をし，海岸から遠く離れたその土地がかつて海域であったと推定した．あるとき，学者の集まりで話をしたところ，神父が「この貝殻はノアの洪水の時に，海からはい上がってきて死んだ貝の殻です．このことはちゃんと聖書に書かれていますよ」と言った．聖書を持ち出されると，だれ一人反論できない時代である．しかし，ダ・ヴィンチは「けれども，神父さま，お言葉でございますが，あの大洪水の間，カタツムリより歩くのが遅い貝が，どうしてこんなにも遠い丘まではってこられたのでしょうか」

このようなお話しが 23 話収められている．ステノ，ハットン，ライエル，ウエゲナーなどの著名人からロシアでの凍結マンモス調査に向かった研究者など，読者の目の前で生き返った人々が話をしている錯覚を覚える．小学中・高学年を読者対象としているように思えるが，高校生や大人も思わず引き込まれる文章である．

地層，岩石，化石といった無機質な対象に興味・関心を引き出すためには，さまざまな工夫が必要であろう．“偉人伝，発見物語”風の人間ドラマで関わった人々の苦労や思考の過程を述べる本書は一つの解答である．

目次 23 項をすべて紹介するスペースはないので，いくつか抜粋する．(2)「大地は変化する」と説いたピタゴラスとストラボ，(7) 地層の年代をひもといたスミスとマーチソン，(9)「地表の変化はゆっくりとすすむ」と説いたライエル，(15) 石ころにひそむチャートのふしぎ発見物語，(21) 塩でできた山を歩く若者．

さて，上述のダ・ヴィンチの会話が正確なものでないことは自明である．これらは項目の末尾に「補足」を設けて補い，巻末に参考図書を 70 冊紹介して，より詳しいことを求める読者をサポートしている．

「あとがき」には著者が仮説実験授業研究会などで活動し，草稿を多くのサークルの方々に読んでもらって，推敲を重ねたと記されている．子供たちをひきつける文章に練られている理由の一つであろう．

本文冒頭に紹介者の半世紀前の想いを述べた．自身の年令を思い知らされ，“そろそろ…”と覚悟をすべきと思うこの頃であった．しかし，著者の西村さんは私より干支で１回りほど先輩である．著者は大阪に在住で，かつては教職にあり，要職も務められた．以前から地団研大阪支部や旧・大阪地学教師グループの巡検などにしばしば参加されている．最近の巡検でお会いした時も，興味・体力とも健在である．

西村さんをここまで地学にひきつけたのは，かつて，大阪府科学教育センターにおられた加藤磐雄さんだという．当時，私も含めてたくさんの教師が加藤磐雄さんを尊敬し，多くのことを学んだ．私は“地学素材を素直に観察し，教材に高める力をもつように”という趣旨の教えが印象に残っている．加藤さんが育てた木々が花を咲かせ，多くの子供たちを引きつける果実に例えられる本と思える．

（大阪支部　佐藤隆春）